

宝永四年の地震、津波

(十月四日)
午の下刻少々地震震度ありて、高潮城下へ押入り、家中断々の者、男女共に山に登り候申付る。城内へも無遠慮なれば、何れへも勝手次第に逃げさしむ。城下に潮さし込め候事昼夜七度なり。

五日は昨日地震高潮に付き、額分中の中付祈禱せしむ。白坪大明神に於ても祈禱す。

六日と昨日より今日に至り少々宛絶えず地震し、潮家中の家にも及ぶ。百名余の百姓共、塩を願出候に付二人に俵を授けす。

七日、今日より地震にて崩れたる城下の所々を普請申付く。

八日、地震にて難義に及び候坊主兩人、並ニ内所の者六十人、社人一人、山伏兩人、借米額出候廻顧の通申付く。塩五百俵買上。総体によへ候様申付らる。

又今度の地震にて破損致候箇所吟味致し、御家花より差出候覚書左の通り。

- 一、城内は差而破損無之候
- 一、待塵敷は亦々か家迄余程及破損候
- 一、養賢寺大破、其外寺々余程損じ候
- 一、西町所々余程及破損候
- 一、城下橋数大小十七ヶ所、いぶ二ヶ所
- 一、塩浜堤百五十町余、浦方分
- 一、城下に押込候波力萬九尺五寸余、所々不測
- 一、牛馬二十六疋、内牛九疋、流死十一疋
- 一、馬四疋、行方不知二疋
- 一、在浦家數四百八十六軒震瀆^カ又日波に取られ候
- 一、田畑高二千四百六十四石八斗余、^{水荒}西蔵にて損毛

- 一、城下初め領内方々^カ龜裂申候
- 一、城下土堤崩長百五十九間余、石垣百二十九間
- 一、^③新地土堤五十七町余、浦方分
- 一、在浦所々山崩大小三十二ヶ所
- 一、死人或拾式人、内^所歩行隠居一人、外在浦の者
- 一、破損船所々にて十二艘、内一艘旅船

此度惣土堤普請、宝永四丁亥年十月廿一日より始め、同年十二月四日終る。開敷三十七町四十九間二尺、内新規十一町五十三間半。圃植丈小八ヶ所、人夫総人數^④三万四千七百九十三人を使役し、右一人に付一日五合扶持米を遣し候筈、合せて百七十三石九斗六升七合五勺を要し候

(考察)

- ① 午の下刻——今の午後一時、まづ晝間であつた。深夜であつたらう。
 - ② 津波の高さ九尺五寸とは丈変、今なら自動車に乗つていた者すべてが溺死といふことになる。
 - ③ 新地土堤が切れて海水が入つたのが五十七町余といふは、この新地、当分はつくられなかつた。五十七町は長さか反別か、不明。
 - ④ 人夫三四、七九三人——今日の労働賃銀安く積つて一人一日千両と見ると三億四千八百万円程になる、それと
 - ⑤ 扶持米で拂つてゐるが、一人一日五合(配給値「百四」として)三千四百いづれにしては大変なこと、この津波におびえて大急ぎにつくつたのが馬場の土堤(養賢寺一桁形)と、中村の土堤(桁形から明神様の前まで)で、今わずかに馬場通りはその跡を残してゐる。
- この宝永四年の地震と高潮、当地方では空前絶後の天災であつたが今日その余の物語は日とんど傳承も残らず、時の流れの中に消えてしまつてゐる。